

# 景観計画における風景の意味とその事例に関する調査・分析

日大生産工(院) 池田 俊彦  
日大生産工 坪井 善道

## 1. 研究の背景

平成16年6月に、我が国初めての景観についての総合的な法律「景観法」が制定され、同年12月に施行された。

滋賀県近江八幡市は、平成17年3月に滋賀県の同意を得て、国から「景観行政団体」の指定を受け、全国初の「景観法」による景観計画「水郷風景計画」を策定し、平成17年9月1日に施行した。

その計画において近江八幡市は景観法による景観計画を風景計画と言い換えている。また多くの条例や計画では風景・景観という言葉が使用されているが、意味を明確にした上で、条例・計画を制定しているものは少ない。<sup>1)</sup>

## 2. 研究の目的

本稿では、景観・風景計画において曖昧に使用され、かつ計画指針および計画手法の策定の根拠となる風景および景観の意味・概念を文献・事例・条例などを通して明確にすることを目的としている。

## 3. 景観計画・条例に関する風景の使用状況

多くの地方自治体が景観計画を進めるにあたって風景という言葉を使用している。しかし景観という言葉と同義で使用しており、また風景条例という名称で条例制定を行っているが、その中では景観という言葉で規制が行われている事例もあり、矛盾点が見受けられる。

このような自治体では風景・景観の定義は重要ではなく、風景という言葉を使用することにより計画自体が住民に親しみやすくなり、関心を持ってもらいやすいという点で使用していると考えられる。また風景の方が広義であるという観点から法的対象と

して利用できる点も理由の一つではないだろうか。風景計画・条例などを行っている地方自治体の中でも風景や景観の認識を明確にしているものはほとんどないが、世田谷区などの以前から住民参加の活動として風景選定を行ってきた自治体では意味合いや捉え方を明確にしている。<sup>2)</sup>

## 4. 風景の意味

### 4-1. 風景という言葉の歴史

時期は明らかではないが風景という言葉は、中国から日本にもたらされたものである。中国では六朝時代(3~6世紀)に景象(形蹟・形状・形象の意味)の対象を自然と捉える傾向から風景という概念とそれに伴う言葉が誕生したと言われており、「風」という自然現象を表す言葉と「景」という視覚情報を表す言葉を組み合わせて出来たのではないだろうか。

日本における近江八景などは中国の瀟湘八景を基に創られたもので、風景という言葉が日本に中国から伝わってきていることを証明し、近世の日本において自然の絶景・美景を何箇所か選定する傾向は後世にまで伝えられ、風景の捉え方に大きく影響を及ぼしている。<sup>3)</sup>

### 4-2. 風景の成り立ち

風景というそれぞれの文字の成り立ちは「風」: 元来方位の神様の下にいる、地域の特徴、固有の文化等を他の地域に伝える神の意味、また「景」: 柱の影で時間や季節を計るという意味である。<sup>4)</sup>

### 4-3. 風景の捉え方の変化

中国から風景という言葉と絶景・美景を風景として選ぶという捉え方が入ってくることにより、それ以後の日本の風景の認識に大きく影響を与えていく

ことになるが、それ以前の日本においては自然を自然崇拝的に見るのが中心であった。そして、1872年W・ガウランドが来日し、日本アルプスの名を世に紹介し、はじめて自然を崇拝的ではなく、美的対象として見ることにより、客観的な見方が加わり、西洋文化の影響により日本独自の美を認識することになる。またそこには絶景や自然への風景の憧れがあり、人々は平凡な風景・日常の風景へ眼を向けず、それにより自然を大きく風景と認識する日本人の根幹的な風景の認識を形成した要因の一つと考えられる。<sup>3)</sup>

#### 4-4. 実用面からみる風景の意味

よく風景という言葉が使用されているのは写真・絵画などの二次元的情報である。新聞などの記事としては会場風景・作業風景・災害救助風景などという使い方でよく使用され、その風景の中で特徴的な要素として、多くのものが人間の姿や行為・営みが構図の中心となっている。このような使用方法においては同義語として認識されている景観では置き換えることはない。

次に記事以外の写真・風景画などでは自然が構図の中心になっているものが大半であり、自然または自然現象やそれに付随する動植物・人間の姿が映されているものがあるが、自然的視覚情報を中心に風景を捉えているという傾向もうかがえる。<sup>5) 1</sup>

#### 4-5. 文献による風景の定義

『大辞林』によると、「景観」を「けしき。ながめ。特に、優れたけしき。人間の視覚によってとらえられる地表面の認識像。」「風景」を「目の前にひろがるながめ。景色。その場のようす。情景。」と定義している。また多くの文献から風景の定義を分析していくと、次のような特徴が導き出せる。

- ・日常生活が大きく影響しており、人々の営み・生活行為(歴史・文化面も含む)などが風景の基盤であること。
- ・人が中心になって主体的な観点で周辺の環境・景色を見ていること。
- ・風景は景観とほとんど同意義ではあるが、そこに人間の情緒や感情に深くかかわる情景・心景を含む

ということ。

#### 4-6. 条例・計画・風景選定による風景の定義

条例・景観計画・風景計画などで明確に示されている風景の概念に関する記述を挙げておく。

条例・計画・ガイドライン

##### ・世田谷風景づくり条例・計画

風景は、風土と文化・歴史の表れであり、生活する人々によって創造され、受け継がれてきたもの。

##### ・美ら島風景作りのためのガイドライン

風景とは、人々の通常の活動範囲で視覚等を通して主観的に捉える印象に加え、それぞれの地域における人々の暮らしや歴史・文化的背景、または自然環境を含めた人々の生き様を総合的に表現するもの。

##### ・ふるさと滋賀の風景作りマスター・プラン

「風景」とは「景観」より広い範囲を対象としているとともに土地や全体の様を主観的・情緒的に捉えるもの。<sup>2</sup>

##### ・近江八幡市水郷風景計画

風景とは長い歴史の流れの中で、人々の五感によってその価値を共有されてきた自然、建造物、まちなみ、田園及び人々の営みによって形成された景観。

風景選定

##### ・私の好きな兵庫の風景 100 選

自然や文化によって生まれた自然景観や営みは、人々によって守り育てられることによって地域独自の風景となる。

##### ・うつのみや百景

風景とはただそこにあるだけではなく、そこにあった自然とそこに住む人々から生まれ、育まれてきたものである。また風景は町の歴史や風土、文化を象徴するものであることから、市民のよりどころとして次の世代の市民に伝えていく必要があるもの。

その他

##### ・「北東北ならではの」風景・景観資源の調査

風景と景観という言葉は一般的には「自然の景色やながめ」を意味するが、この調査では自然の景色だけではなく、歴史資源・文化資源・生活行為や町のたたずまい等も風景・景観として捉える。

#### 4-7. 景観計画で使用される風景の類義語

ながめ：中国から風景という言葉が伝来する以前には「ながめ」という言葉が日本に存在しており、このながめという言葉は「長い」と「眼」という二つの言葉から生まれたもので、「物思いにふけて、じっとひと所を見ていること」とされている。また万葉集においては長雨(ながめ)という掛詞として使われている。<sup>3)</sup>

景観：明治期の植物学者の三好博士がドイツ語の“Landschaft”を本来ならば、「景域」と訳すべきところを「景観」と翻訳してから使用されはじめたといわれている。また風景という言葉が生まれた中国には景観という言葉はない。しかし台湾では景観という言葉が使用されているが、その原因は戦時中の日本占領下の影響といわれている。また景観は日本の植物学ではじめて使用された言葉であり、その後、地理学での用語として定着した。<sup>3)</sup>

辻村太郎氏は「地理学では此の言葉を用ひはじめてから、二十年ほど経過しては居るが、学者によっては可なり多くの意義に使用して居て、正確な定義は未だ決定して居るとは云えないが、大体にみて、眼に映ずる景色の特性と考えて差し支えない」と景観について述べている。<sup>6)</sup>

また田村剛博士は1953年の風景論考において「景観は美的な印象ではなくて、冷静な科学的観察に基づくもので、決して主観的なものではなくて、普遍的性質のものである。景観地理学にしても、地表における地理学的現象を科学的に観察するものであるから、芸術的な見方をする風景の場合とは自ら違ってくる。要するに風景の場合は鑑賞・観賞(玩味・審美・享受)するのであるが、景観の場合には観察するという所に見方の差別があるように考えられる」としている。また上原敬二博士は風景の因子として、地形、植生、一地方の自然区域、景観を上げ、風景の構成要素もしくは下位概念として景観をあげている。<sup>7)</sup>

原風景：自分の中にある体験的・心的視覚情報である。しかしこれは実際ある景色と食い違うことが度々あり、お互いそれぞれ同一の場所について会

話をしていても、まったく違う視覚情報を言うことがある。つまり原風景とは心的印象を通して見た景色・視覚情報であり、自己が体験した事象・その時の記憶・心的要因などが大きく影響している。

またよく都会で生活している人間が地方の農村を訪れた際、「ここが日本人の原風景」などと言うことがあるがそれは間違いであり、原風景とは大きく個人差があるものであり、日本人全体が同じものを原風景として共有しているとは考えにくい。懐かしいなど感じるのは、そのような生活・昔の日本のような景色に憧れているまたは魅力を感じているという点が大きな理由になるだろう。<sup>6)</sup>

#### 4-8. 風景の意味のまとめ

以上のようなことから下の図1のように風景というものは捉えられるのではないだろうか。

風景とは人が主体的に見つめた景色などの総合的なものであり、景観より広義である。

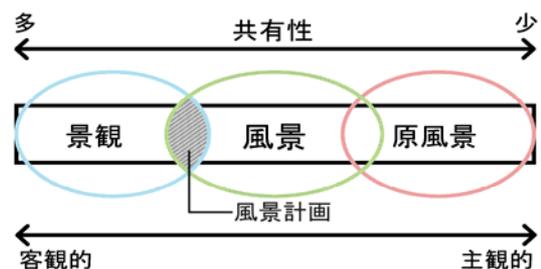


図1. 風景の概念図

そこには心情・体験というものが含まれ、それにより大きな個人差が発生するものである。また「農村風景は自然と人間の長期間の共同作業の結果」「風景というものは生活行為が発発点」という見方もあり、生活行為などは風景に対して大きな影響を与える要因であり、風景形成の基盤でもある。<sup>6)8)</sup>

#### 5. 風景事例に関する分析

##### 5-1. 小田原市ふるさとの原風景100選に関して

本稿では小田原市が選定した小田原市ふるさとの原風景100選を例として一般市民の風景の認識について考察していく。

小田原市ふるさとの原風景100選は小田原市がまちづくりに関心をもち、住民にまちづくり計画に参加してほしいという意図で平成17年8月15日から平成18年1月20日までに住民から原風景を募集し

1,237 件が応募されたものである。また今回、小田原原風景 100 選を分析対象としたのは、気候や文化・歴史など風景に影響をもたらす要素があまり変化しない区域の中で選定されていること、地域住民がお気に入りの風景を応募し地域性を考慮して選定委員会が選定したという理由からである。またここでは題名が原風景となっているが、募集要項において風景と原風景を同意義で使用しているため分析対象として使用した。

## 5-2. 分析を通しての風景の認識

原風景選定において使用された 28 の風景のキーワードから特徴をみる。



写真1・2 小田原ふるさと原風景 100 選の一例

28 のキーワードは 8 分野に分けられており、それぞれ、「思い・雄大な自然・自然と生活・歴史と文化・時代・道・暮らし・五感」とされている。その 8 分野の中では「五感・思い」などの人間が中心として考えられているものの割合が高い。また「暮らし・道・自然と生活」などの生活景に関するものの割合も高くなっている。「雄大な自然・歴史・文化」の割合は日本人の風景の捉え方を考えると低いともいえるが、風景の捉え方が身近な風景を捉える方向に変化してきたのではないだろうか。

以上のことから小田原の人々は身近な風景・生活景に多く目を向けていることになる。また「五感・思い」などの割合が高いことから風景の認識において、人の感情・心的要因が大きな影響をあたえていることが読み取れる。

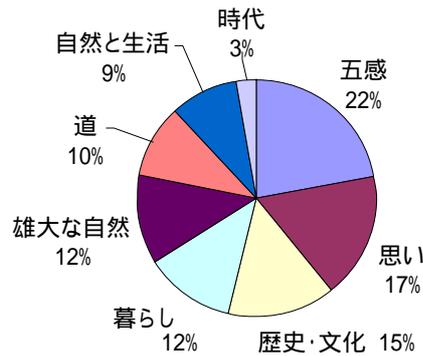


図2. 原風景 100 選キーワードの割合

## 6. まとめ

今回の研究において、風景の概念は主観的であり、人間の感情・体験などの影響を受けるものであり、「心象風景」に近いといえる。それに対して景観の概念は客観的であり、視覚情報が中心のものであるということがいえるのではないだろうか。

そしてこれからの景観計画は視覚的な形態面の規制を中心に行うだけではなく、その土地の生活行為・文化・歴史など、住民の共有する風景観を形成する上で重要な要素を十分に認識し、その上で要素を考慮し、保全・再生をベースとした計画や規制を行っていく風景計画としていくことが望ましいのではないだろうか。

### 注釈

- 1: 欧州の都市風景は評価が高いが、日本の都市風景の中では自然的な要素が評価の対象になっている。
- 2: 広域景観計画という場合もある。

### 参考文献・引用・ホームページ

- 1) 坪井 善道・本多 正治 「景観法による景観研究手法 近江/信州とイタリアにおける風景計画の比較・分析」日本建築学会関東支部研究報告集 2005 年
- 2) 鶴見 圭祐 「緑のイタリア史」新藤社 2006 年
- 3) 高橋 進 「風景美の創造と保護」大明堂 1982 年
- 4) 内閣府付随機関 国土院 <http://www8.cao.go.jp/okinawa/index.html>
- 5) 坪井善道・廣田純彦・三ツ井茂子 「絵画に描かれた都市景観の景観化及びその評価可能性に関する研究」日本建築学会関東支部研究報告集 2000 年
- 6) 内田忠賢・前田良一・千田稔 「風景の辞典」古今書院 2001 年
- 7) 小林 治人 「設計 その発想と展開」丸石出版 1996 年
- 8) 中村 良夫 「風景学入門」中公新書 1982 年
- 9) 向井 正也 「日本建築・風景論」相模選書 1979 年
- 10) 柳 哲雄 「風景の創造」創風社 1990 年
- 11) オギユスタン・ベルク 「日本の風景・西洋の風景」講談社 1990 年
- 12) 原 昭夫 「自治体まちづくり」学芸出版社 2003 年
- 13) 内田芳明 「風景とは何か～構想力としての都市～」朝日新聞 1992 年
- 14) 進士 五十八・原 昭夫・森 清和・浦口 静二 「風景デザイン 感性とボランティアのまちづくり」学芸出版社 1999 年
- 15) 世田谷区市報 「街に出る1~4」 1999~2003 年
- 16) 世田谷区風景デザイン委員会 「世田谷らし 風景の創造をめざして」 1987 年
- 17) 小田原市ホームページ <http://www.city.odawara.kanagawa.jp/>
- 18) 世田谷区ホームページ <http://www.city.setagaya.tokyo.jp/index.shtml>
- 19) 近江/信州ホームページ <http://www.city.omihachiman.shiga.jp/>
- 20) 宇都宮市ホームページ <http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/>
- 21) 滋賀県ホームページ <http://www.pref.shiga.jp/>
- 22) 兵庫県ホームページ <http://web.pref.hyogo.jp/>
- 23) 国土交通省ホームページ <http://www.mlit.go.jp/>
- 24) 国土交通省東北地域整備局 <http://www.thr.mlit.go.jp/>
- 25) 里山フォーラム in 麻生 「里山の風景から」講談社 2002 年